平新報

發行毎月三回 五ノ日發行
編輯兼發行印刷人 山野邊庄吉
發行所 福島縣平町二丁目二番地 平新報社
廣告料五號十二字詰 一行一回五十錢 場所指定倍增
一部定價金十錢送料五厘

記念すべき御眞影の奉戴

御大典も近づきて國民擧げて奉祝すべくの氣分漲りつゝある時、地方濱三郡の最も記念すべき

御眞影　御着は去る十二日午後一時四十二分平驛着平町民有志は驛廣場に奉迎、在平各學校生徒兒童は傳達場たる高月臺磐城中學校に至る沿道に奉迎申し上げその夜は同校に安置、十三日午前八時より同校講堂に於て肅嚴なる濱三郡百拾の傳達式が執行された。因みに縣よりは知事代理として大久保學務部長來供された、終つて在平各校は直ちに其校にて奉戴式を行つた

平町各校の御大典奉祝

平町學校長會は十日第二小學校で開催、御眞影奉迎の件、御大典奉祝方法の件につき協議、御大典拾日は晝間旗行列、夜間に入りて提灯行列をなすべく畧決定せるもの〻如く、うち中學校ではラッパ手三十名を生徒に教練せしめ當日を意義あらしむるとの事である。

御大禮に關する講演會

神職會石城郡支部では十四日午後一時より舊郡役所會議室に於て國學院大學植木直一郎氏の御大禮に關する講演會を催した。

◆國學院大學教授植木直一郎氏。

磐中辯論部大會

磐中辯論部大會は十四日午後一時より同校講堂に開かれた。

平十三日會

平十三日會では十三日夜平銀行樓上に於て左の講演があつた◆陪審法に就いて平區裁判監督判事千葉公資氏。

磐中三氏叙位さる

磐中教諭の左の人々は今回從七位に叙せられた◆廣田德行、小野寛美、遠藤平太。

滿洲の概括的觀察（二）

在京城　湯原亮夫

關東洲及南滿洲鐵道附屬地の概況

一、關東洲　關東州は遼東半島の尖端を占め東は黄海西は渤海に面し地域は普蘭店の地方長陽寺附近より貔子窩の東方碧流河に至る區域であつて二〇八方里餘の面積に更に其附近の島嶼、面積一六方里を包含するに過ぎない、區域としては幾何も無いが之の關東州が關東聽に於ける政治の中樞軀幹を爲すので都市としては旅順大連を主として金州、普蘭店、貔子窩其他の小都市か散在して居る。殊に商港としての大連の設備の如きは實に完備したもので東洋一の名を決して恥かしめない。旅順の戰跡に到つては二十年後の今日今尚心膽を寒からしむるものがある。軍國主義を歐歌するものでは無いが當時の戰況を知る事は尙時の歷史を知る所以であるから特に稿を別にして詳記して見たいと思ふ。而して關東州の人口は內地人總數九萬三千百餘名朝鮮人は僅かに九百七十餘名支那人六十六萬七千六百餘名總計七十七萬二千二百餘名居住して居る。概括的觀察すれば以上にして盡きるが詳細に觀察する時は實に禿筆を以てしては書き盡せない複雜な關係にある、例令日支國交關係、國際的關係、或は政治的關係然し夫れ等は之れを略する事として次ぎに鐵道附屬地の概況を述ぶる。

二南滿洲鐵道附屬地　南滿洲鐵道附屬地と云ふのは大連長春間四百三十八哩奉天安東間百六十一哩其他旅順線營口線煙臺線撫順線運檢線瓢兒屯線等の諸線を合し實に六百九十四哩の長きに達し其間鐵道用地及市街用地として沿線地域を有して居る、附屬地とは之れを指稱するのであつて地域の廣狹は市街地或は特殊の事情ある地等の關係から一定して居らぬが大連長春線但し關東州を除き鐵道を中心に最も廣き地は四百二十米餘反對に最も狹き地は七十二米餘安奉線の最も廣き地は三十六米餘最も狹き地は十六米餘であつて兩線の附屬地帶を平均する時は鐵道沿線六十二米が附屬地とある譯けであつて其面積が約十六方里餘となる、市街地とか工業地帶とか或は鑛業地帶とか言ふ處は入用な程度に廣濶な地域を借用して居るから誠に好都合に出來て居る。而して我行政權の完全に行はるゝ範圍と言ふのは以上述べた關東州と南滿洲鐵道附屬地であつて其面積僅かに二百四十一方里に過ぎない、然し乍ら南滿州の大都邑は悉く之の鐵道沿線或は附近に位置して居る關係上鐵道附屬地は宛然全滿州經濟勢力の中樞軀幹を爲すの情勢にあつて大なる意義を持つて居るのである、次ぎに附屬地內に建設された市街は一名日本町と稱し新しい建築規則の適用に依つたもので現代的文化味を多分に持つ晴々した町である、石造と煉瓦の二種類に限定されて居る關係上實に氣持善く市街は整頓されて居る、內地人の大部分は之の市街地に居住して商工業を營んで居る、而して南滿洲鐵道附屬地主要都邑の人口關係を左に掲げて如何に日本人の勢力が伸展し居るかを考察するの一端に供しよう、玆に一言するの要あるは附屬市街地は日本人には特に各種の恩點があり都合善く保護されて居つた關係上最初は仲々素晴しい勢力を以て發展したそうだが最近に到つては支那商人の根氣强い侵蝕に遭ふて漸次壓倒せらるゝの情勢を示しつゝあるは各都邑共同一であつて年々素晴しい勢で支那人が增加して行く之等の現象を在滿日本人が慨歎して頹勢挽回策を當局に種々獻言し對策に腐心して居るが吾々も日本將來の爲に閑看を許さぬ差迫つた問題の樣に觀察した、最も僅少な問題でも事日支外交の問題となるは勿論延いては國際的關係を持つ現況に在つて對策も複雜な問題ではあらうが在滿日本人を充分不安無き程度に保護する事も考慮すべき問題ではあるまいか。

◇因みに筆者湯原氏は宮城縣伊貝郡出身朝鮮警部なり

南滿洲鐵道附屬地主要都邑人口調

都邑名	日本人	朝鮮人	支那人	外國人	計
瓦房店	二、九七三	二八	七、九〇七	—	一〇、九〇八
大石橋	二、九三〇	二三	四、一七四	—	七、一二七
營口	二、一九九	一六	一、九〇三	—	四、二九八
鞍山	五、九一八	一〇三	七、〇四六	一	一三、〇六八
遼陽	五、〇八三	三〇	六、一〇〇	—	一一、二一三
奉天	一八、六五六	二七五	一五、九八四	九六	三五、九〇一
本溪湖	二、四八七	六三	一、三〇〇	—	三、八五〇
安東	二、二七五	六、九五一	三五、二一七	三	五三、五一五
撫順	四、七三四	八四八	四六、五三〇	六六	六二、一七六
鐵嶺	二、七六八	七	二、五九六	—	五、四五四
開原	二、五七六	三五〇	一六、五九六	五	一九、五三七
四平街	三、一三四	二七〇	一〇、九五三	一七	一四、三七四
公主嶺	一、九八一	一三	一〇、三七四	四	一三、四九五
長春	九、四〇〇	六九	二一、九四四	五五	三一、六四八
計	八六、二三七	九、九四九	一八八、八一四	一、六五六	二八六、五五六

信仰の人々へ（六）

湯本町　片岡鎌三郎

一葉落ちて天下の秋を知る我々はドウデモ國民的自覺せねばならぬ秋が來た。何時迄も長夜の夢をむさぼるわけにゆくまい。今東京では政界の大御所と呼ばれ、名士と稱へられ天下の選良となつて堂々議政壇上に立ち世の儀表たる人々が醜陋の態、吾々は遠く他山の石と看過すわけにもなるまい其此處に至る所以を探究せねばならぬ。彼の人とて一代の博識明敏を以て師表と仰がる人であるかも知れん只惜む。今日不正の徒とならしめたは深く喰ひ込んだ種々復雜な根底因緣があらねばならぬ。吾々は其の罪を惜み其人を惡ます、其罪せらるゝや、其人を悔へんが爲めだ。刑は刑無きを期す。春秋の筆法で云ひば堯舜の世を謳歌したものだが矢張其處に眞理がある。昔は罪を犯せば其の人を惡みもしたが、今日の刑事學上では其罪を犯させる樣にした社會も其責を負はなければならぬ。今日の思潮混沌は佛教の五濁惡世だ。智慧ある惡人天下横行の君子跋扈し、善人屛息只管に怖氣ついで手も足も出せぬ世の中だ。吾等が絕對に信じ鐵壁と賴みし銀行は惡事の限を盡し破綻し整理の美名に陰れて荏苒悶つてる。其裡には正直正銘粒々刻苦喰ふや食はずの難行苦行、一步一步の樂を一朝に打壞し老後の安心と賴み身命を賭しての財寶。無慘や智慧ある惡人に踏み躪られ、見るも慘に喘ぎつゝ、鐵火の苦惱を受けつゝ此世ながらの阿鼻叫喚焦熱地獄、此慘狀此時、此際、眞に自己を顧み憂國の士は敢然起て宗教家も醒めよ。今にして起たざれば何時の世如何なる時に起つのか。現時の思潮を何んと思ふのであらう。正しく末世五濁腐敗頽落此かる世に馴致せしめた責は大に宗教家にもある。全國六萬余の僧家よ。今迄の如く墓守死靈の番人以外何の爲すなき生活から醒めなくてはならぬ。眞理の前にも佛の前にも佛法を活して勁かせなくては白法隱沒經卷あれど、修業すれど、一分の利益功德なからん。先づ國家を祈りて、須らく佛法を信ずべし、の聖教默止難し。近時東京佛教團が思想國難の秋。各宗、各派を論せず打て一丸となり、全國相通じて起つと聞く。遲い遲い遲くとも爲さざるに勝るや論なし。

吾々は眞に日本國体を知り日本國民精神の歸趨を知らねばならぬ。吾々は教育勅語を日常讀誦禮拜し、我國体の精神を心肝に銘記してこそ大和民族の使命である

忠孝

我身ハ有ニアラズ亦無ニアラズカラ色ニアラズ

我身ハ天ヨリモフラズ地ヨリモ出デズ

父母ノ肉身ヲ分タル身也我身ヲ損スル八父母ノ身ヲ損スル也此道理ヲ辨ヘテ親ノ命ニ從フヲ孝行ト云フ親ノ命ニ背クヲ不孝ト申也

人身ヲ受ケタルモノハ忠孝ヲ先トス可シ（聖訓）

若夫れ自己を忘れ、父母の頭を打つ如き痴漢あれば、拳を固めて石を打つが如しの聖教龜鑑千載に曇なし。

孝

狹義的に解して、親に孝養自己として孝なる者は一家和氣藹々生氣潑溂活動の源泉玆より出づ。社會に及しては人倫五常の道となり。孝友和信の四德ともなる。仁も義も禮も信も皆孝より出づ、されば孝は社會道德一切を總括したものである神武大帝は『用て大孝を申べん』の勅教炳として日星の如し。

聖教には孝は高也、天高しと雖孝より高からず、孝は厚也、地厚しと雖孝より厚からず。孔子は孝は天下の要道也。政治の根源亦孝より出づ。

孝にして國家的廣義に及した時忠である。忠は中心正道に集まる、即忠孝道に於て一致忠孝一如此道が天下の大綱である。億々萬人皆此大綱を握て居れば誤が無い。此大綱弛みし時は、綱紀弛綏である。國民の大精神皆此大綱に集まる時綱紀の肅正である。サレバ政治も孝道より出でざるべからす。今日政治家の陋態は爲政家道心の弛綏した立證である。所云社會全体共同した責任であるを知らねばならぬ。彼等を侮へ、忠孝の道に復らしめねばならぬ。思想は思想を以て制せねばならぬのである。

寄稿歡迎

平禁酒會代表理事馬場豊次郎の弔詞

故桐谷文平氏九日葬送の際平禁酒會代表、理事馬場豊次郎氏の朗讀せる弔詞左の如し

謹みて故福島縣下禁酒同盟長平禁酒會長桐谷文平先生の靈に告ぐ、先生博覽强記文章に巧みに又頗る辯說に長せり。曾て日露の役に從軍して殊勳あり金鵄勳章を受く。其の人と爲りや溫厚篤實にして眞に君子の風あり、一たび先生の風采に接するや人皆景慕せざるはなし、先生曩に磐城中學校長より擢んでられて縣社會課の長となるや全校職員生徒並地方有志先生の留任を嘆願して止まず是其の先生德望を證して餘あり先生の縣下を遊說せらるゝや常に皇室中心主義を以つて社會教化に努められ人として特に日本人として其の進むべき踏むべき道を說きて諄々として倦ます、熱誠に其の職に勤められたることは是亦世人の熟知する所なり、偶々講演壇上にて發病遂に其の職を去りて靜養中大に飲酒の有害を体驗せられ之が矯正を社會にも及ぼさんと欲し大正十五年の初め平禁酒會を起し先生私財を投じて之を計畫せられ今や會員二百三十名に達す、又縣下四十餘の禁酒會に之が聯合同盟を勸誘して成立し先生其の同盟長に擧げらる。先生の社會教化の爲めに一身を忘れて盡瘁せられたるは世人の等しく知る所なり國家は益先生の如き人格者の貢獻に俟つ處多き秋に際し先生再び病革まり今や則ち亡し豈に哀悼に堪ふべけんや、然れども先生の德風を膽仰する者愈多く先生の主張を紹述する者益多からんことは必や疑ひなし先生冀くは安かに瞑せられよ恭しく弔す。

桐谷家への弔電弔文

桐谷文平氏の訃、傳はるや同家へ哀悼の弔電弔文を寄せられたるもの左の如くである。

弔電

◆東京子爵石井菊次郎◆第二高等學校長玉虫一郎◆福島縣會議長湊芳藏◆東京高等師範學校教授馬上孝太郎◆郡山市安積中學校長一谷源八郎◆相馬中學校長千秋穗三郎◆安達中學校長松本午次郎◆喜多方中學校長長谷訥藏◆福島市二宮哲三◆伊達長岡鐸木三郎兵衛◆若松市會津高女校◆女子大學櫻楓會◆栗山泰晉◆福島縣廳佐瀨剛◆東京星一◆伊達教育部會長▲福島市近藤節太郎◆土崎大出廉治◆福島高等商業學校濟島操◆福島市小林富吉◆二本松田倉孝雄◆山田村安島重三郎◆耶麻郡奥川村五十嵐權三郎◆三春禁酒會◆郡山市長大森吉彌◆喜多方三浦三彌◆飯塚傳吉◆三春貝山靑年禁酒會◆長崎市松澤辰三郎◆東京田中芳谷◆福島柳沼安藏◆京都市秋山角彌◆東京小池與一◆岐阜縣河上和一◆東京深井鑑一郎◆福島市岸田儀一◆東京杉本トク◆高松南新町杉山鶴吉◆三春海野文藏◆奈良縣天理中學校渡邊周吉◆神田高野元◆東京市郵便安藤誠◆澁谷上澤軍次◆石川郡淺川自覺禁酒會◆岩代桑折、佐藤友一◆東京大寺只野一郎◆福島高橋錫治◆須賀川櫻內利三郎◆福島市寺澤元良◆耶麻郡山鄕禁酒會◆福島市小檜農夫雄◆福島五十嵐進◆植田町古川傳一◆福島齋藤彌一郎◆白河阿部井廣三▲郡山杉山政治▲東京宮澤武雄▲新橋靑木林一郎▲保原小野賢次郎▲東京市本城巖▲福島市松本唯雄▲羽前境大川庸助▲仙臺市須藤春一▲東京澁谷佐藤褒治▲土浦町三井司▲本宮町伊藤識▲須賀川市川孫重郎▲福島市東安寺▲福島市鈴木定藏▲千葉縣福井久▲神戸市中村貫一▲福島市佐貫行▲西河原桐谷四郎▲八島田沼崎淸助▲大阪國眼豊子▲京都市横地石太郎▲福島市久恒重幸▲郡山市福島縣共濟委員▲北海道八雲中學校中賀仙三郎▲石川町菅野三郎治▲福島市高今朝四郎▲郡山市志賀兼四郎▲石川中學校西牧盛雄▲田村郡遠藤辰雄▲中村町南崎兼左工門▲福島市服部保一▲福島市高岡添野信▲福島市鈴木周次郎▲東北帝國大學林鶴一▲九段坂修道院高野佐三郎▲福島福尾晴明▲星會磐中同窓生一同▲中央大學學員會理事法學博士堀江專一郎「弔文」▲郡山市安藤國重「弔文」▲原町靑田初男▲保原今村武男▲千葉縣一ノ宮齋藤國吉▲東京高知尾誠吉▲赤塚石塚龍覺▲東京太田雅光▲福島市富澤淸▲福島市佐藤登▲內鄕村須藤▲伊達郡小島今江卓治▲福島市岡本▲植田町後藤▲横濱應崎正見▲落合村加藤寛太郎▲岩城柳川町齋藤善三郎▲八丁堀淸野才二▲岩城本鄕永茶丹治▲京都市吉田、正木信功▲福島鈴木周三郎▲武藏大崎瀨谷美光▲道方森川重雄▲熊本坪井眞船民尹▲東京帝國大學名譽教授文學博士服部宇之吉「弔文」

弔花贈呈者は大橋眞佐子一、磐中同窓第十六回卒業二八會一、平陽女學校職員一同一、全生徒一同一、平新報社一、磐城中學校職員生徒一同一、磐中同窓會一、弔旗、平陽女學校々友會一、

磐城湯本
溫泉旅館
松柏館
電話特五番

冬の學生服特賣

飛ぶ樣に賣れる
なかやの學生服

長ズボン付上下
二號……八九歲向　二圓二十錢
三號……九十歲向　二圓四十錢
四號……十一二歲向　二圓六十錢
五號……十三四歲向　二圓八十錢
其他の各種澤山取揃つて居ります
尙中學服も揃つて居ります

平町二丁目
なかや洋服店
電話二〇三番

X光線科
上田耕醫院
平町南町　電話一二九番

平町田町
高久病院
電話五一三番

代理店
平町五丁目
山野邊藥局
藥劑師　山野邊東次郎

▼大瓶　五八〇瓦入　金貳圓
▼中瓶　四〇〇瓦入　金壹圓五拾錢
▲四季の御進物用又は病家の御見舞品として最も好適で御座います

不思議な滋强靈液
まむしのエキス

本酒を用ひて適切に靈能の分る人々

養命酒は酒にして酒に非ず藥餌用として御婦人にも用ひ易く强力なる榮養素は惡疫を豫防し萬病を擊退する眞に健康の好伴侶なり榮養を貴ぶ人は勿論殊に
結核素質者○胃腸病○神經衰弱○精力減退○貧血性○不眠症○病後衰弱　婦人病ヒステリー○勉强又は激務に疲れ易き人○健康者朝夕の一杯元氣旺盛其他慢性諸病に惱み醫藥に効なき方は論より證據先づ一瓶を試み其眞價を知り御愛飮あらん事を御薦めいたします

內科、小兒科、皮膚科
藤沼醫院
平町紺屋町
電話五〇七番

內科
外科
一般診療
片岡醫院
片岡鎌三郎
湯本町驛前

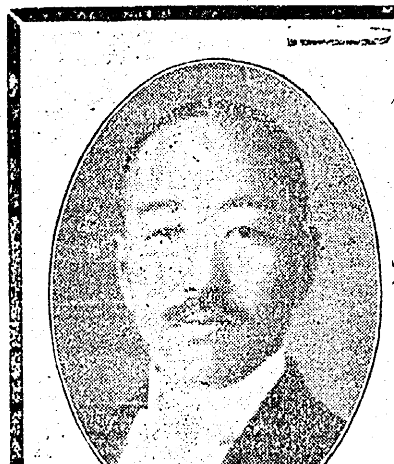
理化學研究所製
吸入用酸素・酸素吸入器
優良ナル理研ノ酸素ノ御用意ヲ
平町四丁目
關內藥舖
藥劑師　關內榮助
電話四〇番

地方社會教界の眞人 桐谷文平氏の葬儀

故人を偲ぶ悲極の弔詞

氏は常に日章旗を持す 思ひ遣らる生前の事ども

慈照院文學章平淸居士故桐谷文平氏の葬送は本紙前號々外を以って報道せし通り去る九日午後二時平町胡摩澤の自宅出棺同町長源寺に於て執行された、天もこの偉人の葬儀を意義あらしむるべきか、八日夜來迄大雨しきりなりしが當日晴天となる。……葬儀係は胡摩澤組合の花澤久一郎、同兎五六、同文庫、其他町内の人々、磐中職員側よりは廣田德行、近藤廣記、大橋秀冬、山本良作、其他磐中同窓側より山崎淸二、淸水廣政、松本榮一、酒井淸、蛭田利光、山野邊庄吉、日野良太郎、山崎忠二、武川信夫等其他より馬場豐次郎、酒井猶次受附會計係りとして、接待係は遠藤平太、諸橋元三郎其他、葬列係は山崎宣吉、橋本芳太郎、新田目春松、關内正一、高濱兼義、式場係には小野寛美、山名隆貞等各分擔



故桐谷文平氏

係りとしてその掌に當り、斯して定時より一時間遲れ午後二時出棺葬列は古式に則り左の如き整列で式場長源寺に向ふ、因みに大導師は長源寺住職栗山氏

◈氏紋提燈◈燒香◈酒水、門人として日野良太郎、◈散華◈花皿二、平陽女生徒◈彩幡四旒、門人として伏見文彥、佐々木孝一、山崎忠二、齋藤晃◈龍辰『門人』◈挑燈兩箇◈白高張◈白幡四旒、門人として武川信夫、中野勇雄、靑天目增藏、山野邊庄吉◈銘旗、◈吊旗、◈供華、◈花環、◈生前帶用、愛用品勳章、辭令、軍服等、門人として蛭田利光、關內正一、◈供膳、遺族桐谷正和、同暉、義男、哲夫、邦雄、◈香爐壹對、門人として諸橋元三郎、永山勇吉◈役僧、◈白幡四旒、◈靈牌『嗣子桐谷文雄』◈法蓋遺族近親桐谷マサ、文子、ツチ、稻川ヨシ、田村にほ、同しづ。◈法炬略◈一般會葬者◈押喪『アトオサヒ』『喪儀委員長』弔詞は左の順序にて皆故人を偲ぶ言々句々血涙の情會葬者を感涙せしめた。

弔詞

一、福島縣知事加勢淸雄、
一、福島縣敎化團聯合會會長
以上阿部社會課主事補代讀
一、日本赤十字社福島支部長『伏見平町長代』
一、日本赤十字社福島支部平町分區長『伏見彥衛』
一、福島縣聯合青年團長『大森勇代』
一、磐城中學校々友會長『唐土齋治』
一、平陽女學校長『酒井猶次』

一、磐城中學校同窓會長『酒井淸代』
一、福島中學校々友會『波岡茂輝
一、郡山共濟委員會
一、石城共濟委員會大內勇
一、平町十三日會『木村磐高女校長』
一、石城兒童研究會『我平第一小學校長』
一、平禁酒會『馬場理事』

其他平第一、第二小學校の弔辭は靈前に捧ぐ、式終つて嗣子、近親代表桐谷師氏の挨拶あり當日主なる會葬者は山崎與三郎新田目善次郎、金成通、小野晋平、酒井嘉藏氏等平陽女學校の生徒一同、磐中生等多數の會葬者であつた、而して嗣子文雄氏遺族は十一日午前六時五十九分報告のため故鄕に出發、見送り人は山崎光雄、廣田德行、近藤廣記、大橋秀冬、馬場豐次郎、高濱兼義、諸橋元三郎、酒井淸、松本榮一、新田目善次郎、山野邊庄吉等故人生前の様子を聞くに、

一、**愛用品**としてハンケチ大の日章旗なかに明治神宮の御守りは常に身を放さなかつた、先生の思想と日常生活が思ひ遣らる。

一、過般神壇を購ふて安置し、毎朝同病の諸橋、二宮等々を全快させ給へと念じ居りたりとか。

一、各般に亘る藏書は幾千を知らず常に書籍を放さざりしといふ、

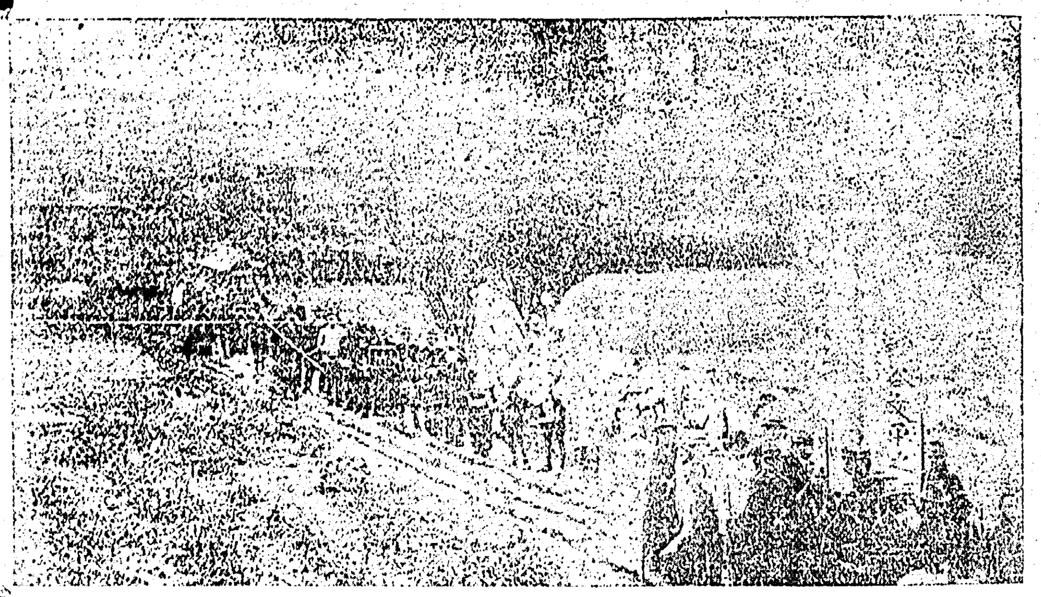
一、かつて八月十二日二八會の際先生を案内せしに十月の同窓會と感違ひされてか、高月臺の磐中校に拾二日午後一時頃出頭せしとか、これが磐中校へ最後の訪れでありつらん。

一、**本紙へ寄稿**されし……主なるもの左の如くである。

◈左右傾運動『三年一月五日附發行』◈悼惜元和園主人『三年一月二十五日發行』◈賞讃すべき柔道有段者會『二年八月十五日發行』◈兒童研究の回想談『二年七月二十五日發行』◈叟石君を悼む『二年六月五日發行』◈希望と題して磐中開校記念日に際し『二年五月二十五日發行』等尙ほ氏の

略歴は

明治二年六月十七日千葉縣長生郡西村大字水沼生れの行年六十歳、二十年千葉中學校を卒業して上京、二十六年法學院を卒業伊豫の松山中學校を振り出しに、群馬縣安中中學校敎諭から福島中學校長に更に大正三年九月五日西村岸太郎氏の後任として磐城中學校に轉じ大正拾年三月末日迄在校、引いて本縣社會課の新設さるゝや同課長主事となり病氣のために十三年退職、平町胡摩澤に靜養中近來血壓等も底下しつゝあり平禁酒會長、石城兒童研究會長、又は共濟會長、平與國會長等の職に在り良く社會公益事業のため直接間接力められ、平十三日會の如きも氏の創設に成つたものである又日露の役に出征せる事あり、陸軍步兵中尉、從六位勳五等功五級である



故柩葬列長源寺に向ふ

御大典奉祝と 本社の勤續店員表彰

近時權利、義務の踏き違ひから思想の惡化せる今日拾年なり……二拾年なり一商店に奉公するといふ事は並大體の事でなく引いて主人側も拾年も世話なすといふ事は其處に相互の德と情義の深きを思はしむるものであります。この意味に於て時！御大典の嘉節に當り本社は左の方法で勤續店員表彰をなす企てにつき調査等に御便宜を與へられん事を。

一、平町の商店たる事、
一、銀行、會社、消防、官公吏、旅館、料理店等はその機關組合等にてそれぞれ常に表彰の運びになり居れば省き一般商店たる事、
一、一商店に拾年以上の勤續たる事、
一、途中己むを得ざる事情のため退店するも一商店に勤務ならばそを通算するものとす、

審査等は本社にて審査委員を囑託しつゝあり調査もれあるやも知れず左の件御知らせ下されたし、

▼店員姓名、店主名『屋號職業』店員生年月日又は年齡、性行等表彰の參考となるべき事項、

右調査は有志店主に依賴するも若し通知あらば本社員出向調査に當ります、

一、表彰方法は第一紙上表彰にて他は考究中であります。

昭和三年拾月

平新報社

右表彰に際し本社は萬遺漏なきを期せんがため左の人々を顧問、審査委員に推戴囑託す

『次第不順』

◈顧問

平町長	伏見彥衛
平警察署長	猪狩淸
磐城中學校長	唐土齊治
福島縣共濟委員	靑沼鋒太郎
福島縣會議員	野崎滿藏
平消防組頭	井上茂作
平所得稅調査委員	猪狩庄平
平銀行頭取	山崎與三郎
西村屋藥舖主	鈴木堅助
釜屋商店總支配人	諸橋守次
關内油店主	關內正一

◈審査委員

福島縣共濟委員	大森勇
在軍平分會長	山崎淸三
平町會議員	柏原貞吾
平青年團長	馬目武之助
西村屋藥舖	鈴木邦三郎
福島民報平支局長	山田盤慶
釜屋商店會計	諸橋元三郎
平消防組部長	鈴木長三郎
平町役場書記	渡邊太次郎
辯護士	山野邊義政

平町十三日會

代表 磐高女校長 木村寅三

昭和三年十月九日虔んで平町十三日會の創設者たる故桐谷文平君の靈に告ぐ、凡そ大なる人格は大なる修養の中に生るゝと君は夙に博覽强記精力絶倫を以て世に聞え加ふるに眞人生への號令者として雄渾壯大眞摯の氣魄に富める一事に到りては眞に驚嘆に價する者あり曾て君が磐城中學校長の榮職に在るや地方開發の實現に對し最も重要なる歩みの一として親しく同好の士と語らひ精神的一大團結を實現せんが爲め平町に於て十三日會を創設せられ常に思想界の燈明臺となり眠れる地方民の良心を鼓動せしめ、枯渇せる地方人への生活に再生の生命を附與せられたる偉大なる功績に對しては實に活きた靖献遺言として永へに消えざる靈光を放ち鄕閭の推稱措く能はざるところ然るに偶々二竪の冒す所となるや昏婆扁鵲の効を奏して快癒の一日も速かならんことを祈りしこと一再に止まざりしが俄かに疾革まりこゝにとして遠逝せらる、嗚呼悲しい哉、

今や敎風徒らに空に吹き地上の草終に靡かず、轉た敎界寂寥を感ずるの秋に際し至誠高潔玲瓏玉の如き君の人格を慕ふの念君が偉業に對する憧憬の情一層切なる者あり、然るに今や亡し、嗚呼悲しい哉

然りと雖も梅花は寒苦を經て淸香を發し、人は棺を蓋って定まると君は權力の世界虚榮の世界を棄てゝ眞實の世界に生き現實の世界を去りて永遠の世界に呼吸し大光の動く所の轉化長へに熄まず、妙化の壽命常に活動し、剎那の微と雖も偉大なる力と淸新の生命とを觀じつゝ常に後進子弟の砥礪激勵怠るなきを信ず。

本會亦君が照臨の御靈に醒め益々切磋相努め聊か君が生前の業に酬いんことを期す希くは瞑せよ。

平陽女學校

總代 酒井猶次

謹で、

故本校名譽學校長桐谷文平先生の靈に曰す、

先生 病を得て靜養中にありながらも常に社會敎育の爲めに盡され其見るべきもの甚だ多し。

昭和二年本校は先生を名譽校長に戴き德育方面の御指導を乞ふ、先生の崇高なる人格と深奥なる學識とはよく生徒の腦裡に徹し其心操に感化を及ぼせること幾何なるやを知らず、生徒も其謦咳に接するを光榮とし其德風慕ふて止まず本校の今日あるは偏に先生の賜なりと云ふべし、

去る一日も平時の如く授業を終り夕刻歸途に就くや遽に病を得て病床に入らる悲報一度傳はるや職員生徒の驚愕一方ならず神明の加護を乞ふて御全快の一日も速かならんことを祈る、然るに神明の加護も其甲斐なく、我等の誠意も其甲斐なく、我等の誠意も通せず、無情の風に誘はれ英靈天に昇られ給ふ。

嗚呼悲しい哉

先生資性溫厚謹嚴にして寡言入りては慈父と慕はれ出でては萬人の尊崇する所今や無し、然りと雖も先生が一生を育英に盡されし功績は萬代に絕ゆることと無けん、仰ぎ願くは英靈髣髴として來り享けよ。

弔詞 福島中學校 校友會

會長波岡茂輝

元福島縣立福島中學校長桐谷文平先生こゝに焉として逝く悲しいかな、

君は明治四十年九月六日我が福島中學校長に任命せられ大正三年九月五日轉任を命せらるゝまで我が校に職を奉ぜらるゝこと實に七年蓋し在職年數の長き事歴代校長中の最たり、君が校に長たるや、薫陶洽く及び、德化深く浸潤し、當時親しく君の敎を受けたるもの君を慕ふこと今猶慈父の如し然り而して君の健實なる流風嚴として我が校風の裡に活きて今日に及べり。君によつて我が校の歴史一段の光彩を添へたりと謂ふべし。以上の如きは君が生徒に於ける功績の一片影に過ぎずと雖も又以て君が崇高なる人格の歪豹を窺ふに足るべし、

不肖乏しきを君の後に承けて君の德を懐ふこと久し今や斯の人亡し、嗚呼悲しい哉。謹んで微しんを陳べて君が死を悼む。任天の靈冀くは來り享けよ。

磐中同窓會長

諸橋守次

代讀 酒井淸

人格高潔學殖深博にして一家の見を有し寡言直勢人に接する謙讓にして邊幅を飾らずと雖畏敬の念自ら禁ずる能はざるもの桐谷先生其人なり、六十年の生涯、其半生を本縣敎育に捧げ或は學校敎育に或は社會敎育殊に我磐城中學校の如き其今日を致せるは先生に負ふ所實に大なりとす、回顧すれば大正三年九月我が校長として來任せらるゝや銳意改善を圖り主として精神敎育に留意し、身を以て生徒を薫陶し、誘掖善導至らざるなく、又地方敎育の中心となりて、内外の敬仰する所となる、然るに多年縣案たりし校舍建築の議漸く決せし、新築其緒に就かんとせし時、本縣の新たに社會課を設置し其課長を物色するに際し、先生を擧げて之を起用せんとす、此事を聞き同窓有志者之に和し、切に先生の留任を嘆願せしも、官命如何ともする能はずして、拾年三月泣て先生を送りしなり、これ本縣社會敎育の施設劃策其宜しきを得、着々として效果大に擧る、偶々講演のため縣内を巡視し白河町に至り、病を得、幾ばくもなくして小康を得たりしが拾三年退職して尙專心靜養に力め殆んど健康を回復し、公私敎育のために盡瘁する所多かりしが、昭和三年拾月一日宿痾再發拾月五日遂に起たず、嗚呼、天嗟いに此老を遺さず、哀い哉、然れども先生の遺業は益々發展し、先生に親炙せしもの、今や濟々多士の觀あらんとす、先生の英靈希くは瞑せよ、維れ時昭和三年拾月九日、磐城中學校同窓會長諸橋守次謹んで弔辭を述ぶ。

石城兒童研究會

理事曾我直治

石城兒童研究會長桐谷文平氏の靈に曰す、氏は嚢には征露軍に從ひ千軍萬馬に驅馳して殊勳を樹て後には專ら子弟の敎養社會の敎育に力を致し溫厚篤實而も人格高潔の士として信望一世に高し、昭和二年六月本會の生るゝや其の會長となり特に保育研究の新源泉として重きをなし兒童の福祉增進に關する諸般の施設をなせり、今や本會は氏の眞摯なる研究と熱烈なる指導とにより着々健全なる發達に向ひつゝあるの時不幸此事に遇ふ洵に哀悼悲痛の情に不堪、爾今會員相戒愼砥勵し會長在世の意圖に副はんことを期す、

玆に會員一同に代りて謹で弔詞を述ぶ。

磐中職員 生徒代表

校長唐土齊治

磐城中學校職員生徒一同を代表して元の磐中校長桐谷文平先生の靈に謹んで申上げます、

先生は嚢に本縣社會課長として在任中白河町に於ける成人敎育講演會席上に於て病を得られてから健康の快復に專念せらるゝこと數年近時殆んど舊に復されんとするに當り突然再び病魔の犯す所となり、遂に去る五日午後拾一時永への眠りに入られることは誠に痛惜に堪へざる所であります、

顧みれば先生は夙に本縣福島中學校長として令名を博し更に磐城中學校長として大正五年より八ヶ年の長きに亘り名校長として平の地に任職せられたのであります、

而して先生の崇高なる人格は至る所其德に化し其風を慕ひ深淵なる學殖は經營施設に燦然として其の光を發したことは今更私のドヾを要しないのであります、大正十一年本縣に社會課の創設せられ社會事業、成人敎育の普及徹底をはからんとするに當り時の當局は此重任を負ふ者は先生をおいて他に其人なしとして社會課長に拔擢せらるゝに至つたのであります、當時之を耳にしたる生徒は擧げて先生に別るゝを悲しみ卒業生、地方人士亦磐中より先生を失ふを惜み交々當局に向つて留任の陳情をなしたのも決して偶然でなかつたのであります、併し先生は官命の如何とも詮なく慈父を慕ふ赤子の如き生徒に別れて社會課長となられたのでありました、

社會課長となるゝや先生の蘊蓄せる學殖は勁なる筆數と相俟つて時には紙上に其抱負をのべられ深遠なる思想は雄辯と相俟つて滔々持論を吐露せられ社會課創設の使命を着々實現せられつゝあつた、時偶々病魔に犯され遂に大正十三年公職を辭して平の地に靜養せらるゝ身となつたのであります、誠に先生にとつて嘆くも盡きぬ痛恨事と云はねばなりませぬ。

惟ふに先生は本縣敎育の爲めに人生の大半を捧げられたる恩人であつて學校長社會課長としては勿論福島縣共濟委員、本縣聯合青年團顧問として石城郡共濟會長平町十三日會創立者として或は近くは兒童敎育研究會長其他禁酒會長として死に至る迄世道人心の啓培に盡瘁せられたる近代稀に見るの人格者であり世の先達者であられたのであります。

而して又嘗ては日露の大戰に帝國軍人として赫々たる武勳を表され軍人の最高名譽たる金鵄勳章の拜受者たる勇者であります、即平時にありては文敎の貢獻者であり、有時に際しては國家の干城としての偉勳者であります、蓋し先生の如きは帝國々民としての眞の典型と申すべきでありませう。

而して今や先生は返らぬ旅に立たれたのであります何と悲むべきことでありませう

私の先生を識つたのは今を去る拾數年前私の德島縣に奉職して居る時であります當時先生は愛媛縣松山中學校に在職せられた時であつて私の恩師、今の東北大學の敎授林鶴一先生及先生の友人杉山鶴吉君から先生の名聲を聞き心窃に私淑して居つたのであります、其後大正拾一年私が郡山安積高等女學校長として本縣に轉任して參つた時は先生は本縣社會課長として活躍せられて居つたのであります、當時福島の縣廳に於て又先生の福島市の寓居を尋ねて親しく先生の謦咳に接し互に敎育上の意見を交換し尠からず指導を受けたのでありました、其後私が磐中に轉任して來た後は隱に陽に後援を受け今後幾多先生の援助に俟つものあるに先生は己に逝いて黄泉の客となられたのであります、何と殘念なることでありませう。

先生齡尙漸く耳順に達したるのみにして御家庭には七人の兒女を擁し長男の君は未だ帝大に在學中、幼きはやつと學齡に達した許りであります、之を思ふ時は更に悲痛の感なきを得ないのであります、最後の五日の晩先生の臨終に侍し先生の枕邊に團繞せる、いたいけなる令息令孃の姿を目擊したる私は洵に斷腸の涙に咽びつゝ只管御子供の行末幸多からんことを神に念じつゝ先生の冥福を祈つたのでありました、嗚呼先生は逝くとも其の功績感化は永へに朽つる事なく君を湛へ君を慕ふのでありませう、先生の顏容は咫尺にあるも今は幽明已に境を異にします冀くは安らかに眠り給はらんことを。

磐中十二、三回 クラス會

磐中十二三、回卒業生、中野康平、酒井淸、野崎喜八郎、松井深、根數本一氏等主となり十五日午後八時より平町料理亭松本に於てクラス懇親會を催したが出席多數舊情を溫めたと

螢雪同窓の 舊師へ謝恩

平小學校同窓會は舊師佐藤芳松氏に記念品を贈呈するものゝ如くである。

四第三四二號
昭和三年十月八日
福島縣四倉郵便局長
平新報社長殿

休業磐城銀行內容の件
昭和三年十月五日發行
第七十一號所載

右記事內容中に四倉局事務員大谷某公金千五百圓横領云々の記事有之候へ共右は事實無根にして當局に於ては甚だ迷惑を蒙り居り候係至急取消相成度及請求候也